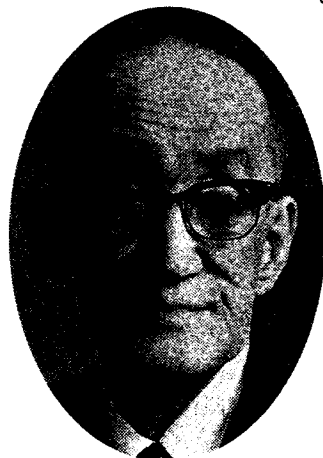




湯浅泰仁

同年に文部省歯科病院に入り
それぞれの道を歩んだ2人
日歯・東歯を出て



瀬戸俊一

ゆ あさたいじん
湯浅泰仁
(1902-1984)

せ としゅんいち
瀬戸俊一
(1903-1988)

榊原悠紀田郎

連絡先：〒222-0012 神奈川県横浜市港北区富士塚1-11-12

文部省歯科医術 開業試験附属病院

歯科医術開業試験は1884年(明治17年)から医術開業試験の一部として始まった。

東京の会場は本願寺浅草別院があたり、実地試験の患者は東大から連れてきていた。しかし次第に医師の方の受験者が多くなってきたので、試験専用のものを芝区につくった。

それも手狭になったので、1907年(明治40年)には麴町区の永楽町に東京医術開業試験附属病院を新設し、ここで実地試験のための患者を収容して試験を行っていた。通称、永楽病院というのはこれである。歯科医術開業試験もここで一緒に行われていた。

その頃は歯科医術開業試験は医術開業試験とともに内務省の所管であったが、1906年(明治39年)の医師法・歯科医師法公布とともに、文部省の所管に移った。それとともに、試験場と病院も小石川区の雑司ヶ谷に移転した。しかし、ここもそのまま永楽病院と呼ばれていた。もちろん歯科医術開業試験もここで行われていた。

1916年(大正5年)になると、医師の方の受験者は急激に減少して試験の呼称も医師開業試験と改められ、この病院も東京帝国大学附属小石川

分院ということになった。

このとき、歯科医術開業試験の方は未だ受験者が多かったので、独立して文部省歯科医術開業試験附属病院となった。しかし、この名称はいかにも長いので、通称を文部省歯科病院と呼んでいた。

この病院には当初嶋峰徹が附属病院歯科医長として就任したが、1917年(大正6年)からは病院長ということになった。

歯科病院という名称ではあるが、歯科医術開業試験を行うので、ここにはその頃からたくさんの人が集められるようになった。

医師の金森虎男、長尾優、桧垣麟三、加来素六、川上政雄、弓倉繁家をはじめとして、桜井功造、永松勝海、山形朔朗、高橋新次郎らがメンバーとなっている。それにつれて研究生や見学生というような形で多くの歯科医専出身の歯科医師たちが入ってくるようになった。

そんななか1927年(昭和2年)、その年に日本歯科医学専門学校を卒業した湯浅泰仁と東京歯科医学専門学校を卒業した瀬戸俊一がここに入ってきた。

その頃、ここには日本歯科医専の出身者は比較的多かったが、東京歯科医専の出身者はこの瀬戸俊一が初めてであった。そんな意味で、瀬戸俊一は注目を浴びた。

東京高等歯科医学校発足の前のことである。

[湯浅泰仁]

一切の拘りを離れて
歯科界の纏め役
をしてすごした人

日本歯科医師会 専務理事として登場

日本歯科医師会是一种の公法人の性格のものであったが、1948年(昭和23年)に民法上の社団法人の組織となった。

それまでの公法人の約30年間の日本歯科医師会の運営は、血脇守之助とそれを支えていた奥村鶴吉による協力なリーダーシップによって進められてきた。この構図は終焉をつけることになった。

新たに社団法人として再発足することになり、佐藤運雄が会長となって運営を担うことになったとき、基本的にはその母体である日本大学歯学部と同窓校友を有力なバックボーンとするという構図は引き継がれ、その運営にあたることになった。

佐藤運雄を直接支える専務理事の役割は極めて大きなものであった。その専務理事には、かねて母校から派遣されて九州歯科医学専門学校の再建に取り組み、成功させて母校に



文部省会議室での湯浅(1977年)



全国学校歯科保健大会(1977年)

帰ってきたばかりの沖野節三があてられることになった。

こうして佐藤運雄は占領下の困難をいろいろ克服して日本歯科医師会の運営を軌道に乗せることに成功したのである。その佐藤運雄は2期の任期を終えて1952年(昭和27年)に引退した。

その3月の第7回代議員会では入交直重が会長に選出された。入交直重は日本歯科医専出身だが、血脇や佐藤のように直接に学校に関与しているわけではないので、従来のように会長の学校を直接のバックボーンとした構図をとることができなかった。そこで、運営上はさまざまなグループの調整とくに大きな課題となっていた。

したがって、その専務理事には、幅広い調整のできる人が望まれることになった。このとき、湯浅泰仁がその役を引き受けることとなった。

『エナメル葉の本態に就いて』

湯浅泰仁は1902年(明治35年)9月、千葉市の富裕な家に生まれている。順調な少年・青年時代を過ごし、日本歯科医学専門学校に進んで、1927年(昭和2年)に卒業した。

中村英男、佐藤精、稲葉宏らと同期であり、掘武、福島満寿雄らの一

期先輩ということになる。

積極的な性格だったらしく卒業するとすぐ、きら星のように多くの人材が集まっていた文部省歯科医術開業試験附属病院の研究科に入って指導を受けることになる。

長く比較的めぐまれた環境下で生きてきた泰仁にとっては、ここでいわゆる他人の飯の味を知ることになった。それが持ち前の大らかさといわゆる、特異な調整能力を身につけることになったようである。

ちょうど泰仁がこの病院に入ったころのことである。嶋峰徹の多年の念願がかなって、このスタッフを中核として新たに国立の歯科医師養成機関の設立が実現した。1928年(昭和3年)10月、東京高等歯科医学校の官制が公布され、翌4年4月に開校することになったのである。

泰仁もここに移って、自分の臨床の研修に専念していたが、東京高等歯科医学校が充実するにつれて、教育にも関わるようになり、1933年(昭和8年)には正式に助手に採用された。

その一方で泰仁は、藤田恒太郎の下で、当時その実態がはっきりしていなかったエナメル葉の本態追及に手をつけることになる。

まだ臨床医が基礎学研究に手をつけるのは珍しい頃であった。

この『エナメル葉の本態に就いて』

と題された仕事は、後に多くのその方面の研究者に引用された。また1945年(昭和20年)には泰仁の学位論文となっている。

1947年(昭和22年)4月、東京医科歯科大学が設立されると、講師になっているが、間もなく退いて、千葉市で開業する。

日本学校歯科医会会長

千葉でもすぐ、県歯科医師会のなかで持ち前の調整能力を発揮して積極的に活動して、役員なども勤めている。そんななかで地元の学校歯科保健の活動をしていた。

こんなとき、日本歯科医師会の専務理事に就任することになったのである。

1952年(昭和27年)には日本が初めて正式にFDIに加入することが決まった。その年の7月、オスローで開かれたFDIの第41回年次総会に泰仁は専務理事の役職上から最初の日本代表として出席することになり、折からバリ留学封の中の検垣旺夫の介助を得てその任を果たした。

泰仁は専務理事就任中、期待どおりに調整の役を果たし、多年にわたって続いてきた図式からの再出発の基礎を築いた。こんなことが認められて、1958年(昭和33年)、佐藤運雄が再び会長になったとき、副会長



ハンブルグでの湯浅(1986年)。



日本歯科医史学会での瀬戸とサイン

瀬戸俊一

に就任している。1962年(昭和37年)に中原實が会長として登場したときは、とくに常務理事として加えられている。

第二次世界大戦のため中断していた日本学校歯科医会1954年(昭和29年)、10月に山形で再建された。そのときから泰仁は理事として会の運営に加わっている。1958年(昭和33年)には副会長に就任している。

この日本学校歯科医会の会員は日本歯科医師会と重なっていて、別建ての組織であっても多年にわたって付即不離の関係で活動してきている。しかし新たに日本歯科医師会の組織運営が変わってくるとともに、別建ての活動が活発になり、両者の間には何らかの調整が求められるようになってきた。

日本学校歯科医会のなかで泰仁は不問のうちに、こういう役割を果たしていたが、1962年(昭和37年)に日本歯科医師会の求心性を強く求めた中原實が日本歯科医師会会長となると、それはかなり顕在的な問題となってきた。

ちょうどそのとき泰仁は日本学校歯科医師会の副会長であったので、さらに一層両者の調整に力を尽くした。

1969年(昭和44年)、泰仁は日本学校歯科医会の会長となって、さらにその努力を重ねることとなった。

こうして特異な調整力を働かして歯科界を歩んだ湯浅泰仁は、1984年(昭和59年)2月、82歳で逝去した。

[瀬戸俊一]

誠実一路に広い視野から 歯科医学に接近し歯科 医学史にも足跡を残した人 歯科医学史研究会

1966年(昭和41年)11月7日、東京湯島会館に、今田見信と山田平太の肝入りで、瀬戸俊一、山崎清、高木圭二郎、谷津三雄、杉本茂春、榊原悠紀田郎らが召集されて、歯科医学史研究の集まりを持ちたいという相談をした。瀬戸と杉本は都合が悪くこれには出られなかったが、ここで“歯学史集談会”を発足させようということが決まり、翌昭和42年1月28日、日本大学歯学部会議室で第一回の集談会が開かれた。

これには今田、山田、山崎、谷津、榊原、瀬戸の他に、正木正を含んで7人が出席して、山崎清と山田平太の講演を聞き、意見を述べあった。これはすぐ翌月にも開かれ、33人が出席した。以後毎月開かれ小人数ではあったが、熱心な人たちがそれぞれ発表をし、討論していた。

この歯学史集談会は1969年(昭和44年)2月に「歯学史研究」を発刊し、

以後年1回のペースで刊行が続けられた。

さらに、1970年(昭和45年)には“歯学史研究会”と改名し、次第に参加者も増え、1973年(昭和48年)には、“日本歯科医史学会”と改名し今日まで続いている。現在、会員は500人ぐらいで、第27回学術大会も開かれるというところまでになっている。

瀬戸俊一はこの集談会時代からの常連であり、何時も討論には積極的に加わり、素養をのぞかせていた。昭和43年の5月の例会には「平安時代の古墳から出土した歯牙について」という演題で発表をしている。

文部省病院一開業

瀬戸俊一は1903年(明治36年)4月、静岡県御殿場の医師瀬戸玄一郎の次男として出生した。順調な青少年時代を過ごし、東京歯科医学専門学校に進む。1927年(昭和2年)に東京歯科医学専門学校を卒業する。大久保信一、福島侃二、水野銈太郎らと同期である。

俊一は在学中から変わった志向を持っていたようである。卒業するとすぐ、当時東京歯科医専では東京帝国大学医学部歯科に対して何となく快い感情を持っていなかったのを押して、あえてその分岐とみられていた文部省歯科病院の研究科に入った。

これは当時ちょっとした話題にもなり、クラスのなかでは「除名にしよう」などという話も飛びだしたほどであった。嘘のような話である。

俊一は外観は柔らかいが、骨っぶしの強い何かを持っていた。これは生涯を通じて変わらなかった。

入局すると、そこでは多くの俊英が集まっていたのに混ざって、懸命な研修を続ける。

臨床だけでなく、夜遅くまで病院研究室に残って仕事をしていたという回想が残されている。それは当時の語り草となったほどであった。

1929年(昭和4年)東京高等歯科医学校が開校するとともに、俊一は認められて副手の形で採用され、さらに助手となる。

一方で基礎医学の研究も手がけ、解剖、病理の研究室にも入り込む。さらにドイツ語習得のため日本大学にも通うという努力をする。

広い視野から歯科医学の研究に接近しようとしたわけで、いわゆる基礎研究の幅も広く、因に俊一の学位は衛生学の領域の研究によるものであった。

臨床でも松垣麟三の下で研鑽を進め、1940年(昭和15年)には講師に進んでいる。

こうして瀬戸俊一は東京高等歯科医学校が東京医科歯科大学になるまでの過程をそのなかで歩んできた。1958年(昭和33年)にはここを退いて、東京練馬の貫井で開業する。

開業しても活動的なことは変わらず、その頃から歯科医学史にも興味を持ち、知る人は知っている存在になっていた。

これが“歯学史集談会”の活動につながることになる。

俊一の歯科医学史についての論文としては「韓国歯学史についての一考察」、「古墳時代の洞窟遺跡より掘

り出されたる齲蝕歯牙」、「医術開業試験委員渡邊晉三先生について」、「エジプト医師の見た古代歯学と衣食住について」、「砂糖の発源とその史的足跡を尋ねて」などがあるが、視点が多岐にわたっていることが窺える。

もちろん、この間にいろいろな歯科大学で歯科医学史の講義なども担当した。

こうして明朗闊達な活動を続けていた俊一は、1988年(昭和63年)、急に視力を失い、表面の活動はできなくなる。しかし個人的には電話などでさまざまな意見を述べていて、やはり知る人は知るという存在であり続けた。

こうした俊一であったが、1988年(昭和63年)11月、84歳で逝去した。

明るく、誠実に歯科医学史に足跡を残した生涯であった。

『歯記列伝』

■榊原悠紀田郎著 ■定価：4,600円

どんな時代でも、どんな社会でも、たしかに表面には出てこないが、そのときどきの流れや動きのなかで、ある役割を果たし、それだけがその人の存在理由であるような人びとがたくさんいることができる。
(一本文自序より)

■目次より抜粋■

清水卯三郎／伊澤道盛／渡邊良齋／桐村克己／小幡英之助／高山紀齋／林譲治／井野春毅／西村輔三／井澤信平／黒田虎太郎／直村善五郎／高木五三郎／一井正典／遠藤爲吉／藤原市太郎／堀内徹／榎本積一／石原久／中原市五郎／朝比奈藤太郎／高橋直太郎／四方文吉／守屋賢吾／血脇守之助／大久保澄龍／高橋コウ／緒方六治／小林富次郎／廣瀬武郎／中尾清太郎／石塚三郎／國永正臣／島峰徹／佐藤運雄／喜多見行正／奥村鶴吉／赤尾酔仙／花澤鼎／川上爲次郎／寺木定芳／藤川宗作／北村一郎／遠藤至六郎／川合渉／榎本美彦／荒木紀男／岡田満／杉山元治郎／三内多喜治／入交直重／山田順策／北村宗一／長尾優

クインテッセンス出版株式会社



〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2丁目1番地 廣瀬お茶の水ビル4階
Tel(03) 3292-3691 Homepage <http://www.quint-j.com/> E-mail quintpub@mb.infoweb.ne.jp